

商学部での学び

瀬 見 博

大学で学ぶ学問、すなわち科学は、私たちが直接的・間接的に経験することができる事象を対象とする経験科学とそうでない非経験科学に大別できます。すべての科学は、まずその理論体系の中での論理的整合性が求められますが、特に経験科学は、それに加えて経験的事実と理論との整合性も科学であるための条件として必要になります。この経験科学は、社会現象を対象とする社会科学と自然現象を対象とする自然科学に分類されますが、社会科学に属する経済科学は、さらに経済学部で学ぶ学問と、商学部で学ぶ学問に分けることができます。両者の違いは、前者が一国全体の経済活動、国と国との経済関係など全体経済を主な研究対象としているのに対して、後者は全体経済を構成している個別経済単位を研究対象にしている点にあります。比喩的にいえば、森全体をそれ自体として分析する立場と、森を構成している種々の樹木を個別に分析する立場の違いといえるでしょう。ところで、個別経済単位は大きく、国や地方自治体、家計、企業の三つに分類できますが、企業は主に財やサービスを生産する単位であるのに対して、それ以外の経済単位はもっぱらそれらを消費する活動を行うといった性格の違いがあります。その違いを意識しながら、商学部では主として、個別経済単位の中でも私たち個人や社会に対して良きにつけ悪しきにつけ極めて大きな影響力を及ぼしている企業に焦点を当てた研究が行われています。

さて、企業を研究対象にするといっても、それらは経済学、社会学、工学、法学、心理学などさまざまな学問の対象となるように複雑多様な側面をもっています。いまそれらを一挙に一つの学問として把握することは難しいので、何らかの方法によってこの複雑多様な企業それ自体という経験対象から、その学問に固有の対象を新たに構成することが必要になります。この構成された対象を認識対象といいますが、この認識対象が何であるのかを把握することがそれぞれの学問を学ぶ際に重要となります。

以上、形式的な話になりましたが、いま一度、皆さん方が商学部で学んでいるそれぞれの学問がどのような性格の学問であり、自らはどのような観点からそれを学んでいるのかを再確認されてはいかがでしょうか。

(商学部教授・学部長)